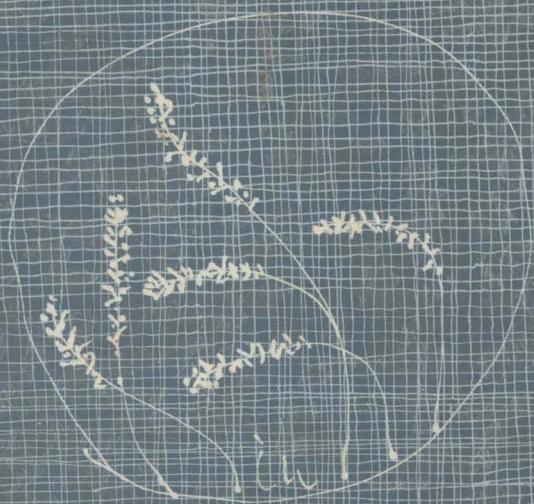
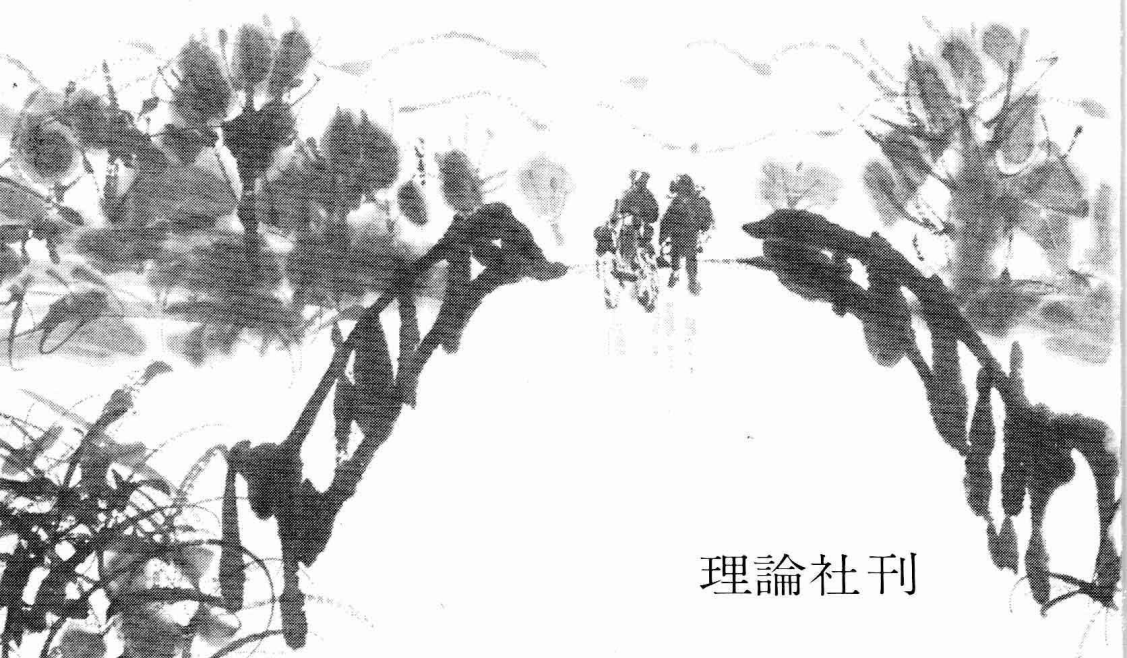


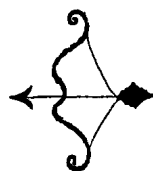


向い風

住井すゑ



理論社刊



向い風

作者 住井すゑ

制作 小宮山量平

発行 小畑光弘

発行所 理論社

東京都新宿区若松町一〇四
電話(二〇三)五七九一(代)
振替口座東京・九五七三六

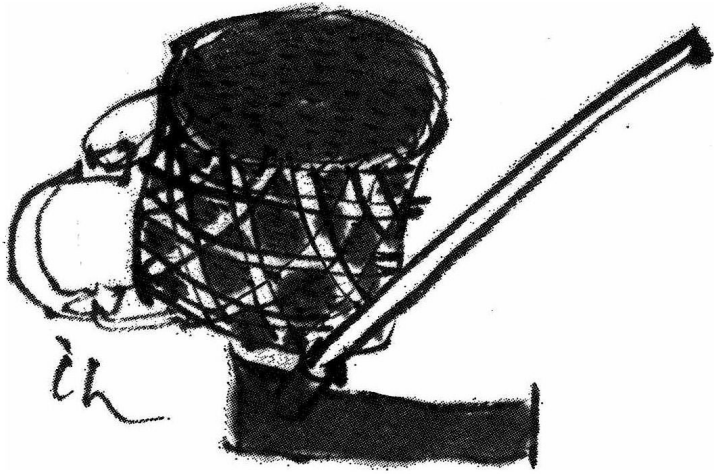
一九七四年四月

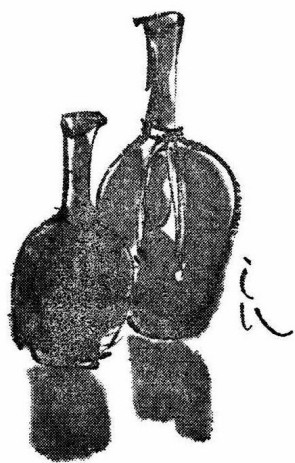
第二刷・発行 ©

一九七四年初版

0093—90202—8924

向
い
風





装帧
北島
新平

井戸端の山吹がまっ盛り。

母親のいくは、その花の燃え立つような明るさに、かえって我が身の暗さを底深く意識した。

「健一は、とうとう死んだのだ。それも、時も所もわからずに……。こんなバカゲたことがあるものか！」

けれどもいくのなげきと怒りは、こんな言葉になってあらわれた。

「健の野郎はかわいそうだ。いつ、どこで死んだかわかりもしねえで、墓に埋められるんだものな。」
するとそれを聞いた父親の庄三が、

「だから、葬式は、できるだけ立派にしてやるさ。そうすりゃ、健の魂も浮かばれる。」と、多少、切り口上で言った。庄三の胸の中にも、やはり、やり場のない怒りがくすぶっていたのだ。

すると、祖母のなか婆さんが、

「健の野郎は、お国のために死んだだからな。ほんとに、葬式はおごってやってくろや。俺も、一生かかったためた、だいじな巾着きんちやく銭ぜにをはたいて出すからヨ。」と、即座に千円投げ出した。それは勿論なか婆さんのへそくりの、ほんの一部にすぎないことはわかっていたし、またそのへそくりの財源が主に米のごまかし売りだということもわかっていたが、いくも、庄三も今の場合、「健もよろこぶべで」と、穏おだやかに受け取るしかなかった。

こんなわけで、もとの陸軍兵長、松並健一の葬式は、一片の遺骨とともなく、全くの形式にすぎなかったが、しかしその為、いよいよその形式が整えられる結果になった。

健一の妻であるゆみも、もちろん喪主の礼儀だからとて、葬式の前日、わざわざ土浦まで出かけ、うまれて初めて、パーマをかけた。そして、葬式の当日は、新調の喪服に、黒のエナメル草履。白粉も口紅も濃い目にして、「百姓のかかあには惜しいきり、ふうだ。」と、会葬の人たちにはめられた。

こうして、「いつ、どこで死んだかわかりもしねえで。」と家族からなげかれていた健一は、昭和二十年六月、二十七歳をもって戦死という墓標の下に葬られた。時にこれ、昭和二十三年四月二十二日……という次第である。

ところで、形式は不思議な魔力を持っている。それまで健一の死にずっと否定的だった母親のいくも、金をかけた立派な葬式のおかげで、こんどはむすこがちゃんとあの世へ行ったような気がしたし、庄三もまた、「これで一段落ついた」と口に出して言ったものだ。

なか婆さんも、ナムアミダブツをくりかえして、孫の冥福をいのる相である。

ところでおかしなことに、なか婆さんの念仏をきくと、まわりの者は来世の幸福よりも、むしろ地獄の責苦を感じた。それは、一つには婆さんの風貌のせい、その逆立つように剛い銀髪には、人をぞっとさせる凄みがあった。また、七十八歳の高齢とは思えぬしんとした腰にも非情の冷たさが感じられた。それに、角ばった顔の中には、まるで年齢を無視したように上下歯がそっくり揃っていて、それが婆さんの笑顔をまでも夜叉然として見せるのだ。

婆さんの実の件である庄三さえ、夕方、土間のうす暗がりではひょっこり婆さんの白髪頭に出くわし、思わずひやりとして「え、ちくしょうめ」と口走ったことが幾度もあった。さしずめ、なか婆さんは、あの仏法でいうところの、永久の悪鬼組なのだろう。ところがそのなか婆さんも、ナムアミダブツをくりかえす。どうやら、葬式という形式は、婆さんをも人並に刺激したようだ。

さて、健一の妻として、喪主の役を果たしたゆみが、そのことによって、ここに人生の区切りを感じたとして不思議ではない。彼女は、もうそろそろ農繁期だからというので、健一の三十五日忌が、葬式の翌日取りすまされたのを機会に、自分の身のふり方をきめることにした。というのは、この機を逸しては、あとはずるずる、田植がすむまでこの家になければなるまいと思ったからだ。それはゆみにとって、もはや無駄働きである。ゆみは、晩^まかれ、早^はかれ、この家を去らねばならないのだ。

ちょうど、三十五日忌の、さいごの客が帰ったところで、庄三、いく、なか婆さんの三人が電灯の下にそろっていた。ゆみは、いきなり手をついて、

「長い間、お世話になったけんど」と切り出した。そして、少し呆れ顔の三人をみると、ゆみは自分でも意外なほどはつきり言った。

「俺^{おれ}は、ここで、ひまを貰^{もら}いたいと思うのヨ」

だが、庄三たちは黙っている。事がいささか重大なので、うかつには口がきけぬと用心してのことだろうか。

ゆみはじりじりして、

「お父つあん、どうだっべか？」と、催促顔に庄三を見た。

庄三は、「ふーむ」と鼻でこたえて、ゆっくり煙草をつめる。「そんなことは聞きたくない」といった様子でもあり、また、ゆみの申し出は至極当然だとうなずいている様子にも見える。

結局庄三の思惑は、はたの者には読めなかった。

女房のいくは、それをもどかしがって、

「お父^とは、どうするつもりだか。何とか返事をしてやらなくちゃ、ゆみだってどうしていいかわから

なくて困つべな』

とたんに、庄三が呶鳴った。

「ばか！　うるせえ。」

「おや、まあ、なんだつべ。お父は俺こと、どなりつけたりして……。」

いくは、薄笑いしながら、ゆみに視線を向けて、

「だまってちゃ、いつまでたつても、埒があくまいよ、な、ゆみ」と、その同意を求めた。

すると、なか婆さんが顔を突き出して、

「だけんど、昨日健の葬式出したばかりで、もう今夜、出るの、退くのと、ゆみも薄情すぎらな。庄が腹立てるのもむりがねえど」と口を入れた。

庄三は、すばっと煙を吐き出し、そのまま天井をにらんでいる……。

婆さんは、理の通った自分のいい分に、伴も同感なのだと思った。そこで、さもなくとも四角張った顔に、一層力をこめて、

「第一、そんなことを自分の口からいい出すなんて図太いあまだ。嫁にくる時、なんで媒介人をたのんだか知んねえのか。媒介人は、嫁のかざりじゃねえ。出るの、退くのかという時の証人だ。この家を出たけりゃ、媒介人を頼んでくるもんだ。」

「うるせえ！　老碌はだまつてろ。」

庄三は、前にも増して癪強くどなった。

「へ……ん。俺がいうとうるせえのか。」

なか婆さんはまともに伴を見据えた。

「死にぞこないのくそ婆め！」

庄三は、悪態でのどがむずむずしたが、それを吐き出すことが出来なかった。婆さんの凹んだ眼玉が、まるで氷の手のように、庄三のど元をおさえたのだ。

庄三は黙って煙管をおいた。

「へへえ。へへへえ。……」と、婆さんは声を下げて、「そんなら、庄、てめえの好きにするがいいや。俺は劫きりつくばりだが、それでも、もうあと十年とは生きめえよ。この家なんぞ、つぶれようと、消えようと、俺の知ったことじゃねえワ。はははは」

そして婆さんは、裏部屋の寢床へ引っ込んだ。

「婆アは、まだあと十年も生きるつもりだったか。ふふっ」

いくは、笑いながら首をすくめ、右手で腰のあたりをさすった。彼女は、庄三と同一年の五十六だが、もう腰が曲りかけていた。歯も、奥歯はすっかりぬけて、残った前歯もぐらつき出している。七十はおろか、六十の坂さえどうかと、彼女自身危んでいるのだ。それなのに、なか婆さんは、どこからどこまで達者すくめ。ことによると、百までこぎつけるかもしれぬ。やれ、やれ、厄介な……。

「お茶でもいれるな、おいく」

庄三が、女房に呼びかけた。

ゆみは、自分で膝を上げかけたが、その時、庄三が、「ゆみ、むろん、俺も……」と、ゆみを引き止めて、「俺なりに考えてる。だけど、何も、今夜でなくてもよかつべ。お前も五年ごしこの家のために一生懸命働いてくれたんだもの、誰も悪くしようとは思ってねえよ」

「そうだとおな」

いくは合槌を打って土間におりた。茶釜の湯をくんでくるためだ。

庄三は、そのひまに、もう一べん低声で繰り返した。

「ゆみ、誰も悪くしようとは思ってねえよ。」

ゆみは、背中のあたりに、庄三の大きな掌がはりついたような生温かさを感じた。しかし、それは今夜が初めてではない。庄三はもともと口やかましいくやなか婆さんからゆみを守ってくれる、それでいて口数の少い舅だった。それが意識してのことか、或いは無意識での思いやりか、ゆみには判断がつかなかった。

ところで、茶釜の湯を急須にうつしているいくには、庄三の繰り返しはきこえなかったが、ふと、部屋をふり向いたせつな、彼女は庄三とゆみの間に、何かのはなしが交されたのを感じていた。そして、それがどんな内容のものか、そこまでの察しはつかないものの、それがゆみにとって、決して辛い性質のものでないことだけはよみとった。というのは、かしげたゆみの首から肩に、妙に甘えた色づきさが流れていたからだ。

いくは、むっとした気持ちを抑え切れなくて、急須を庄三の前におくと、
「俺もこういう話は、やっぱり媒介人を入れてきめた方がいいと思うよ」といった。

庄三はそれには答えず、だまって自分の湯呑に茶をついだ。

座を起つ機会を失って、ゆみはもじもじ。彼女は、ことし数えどしの二十八。肥満型ではなかったが、まだ嬰兒に乳を吸われたことがないせい、坐った膝がむっくり盛り上って、ちょうど膝頭に当たった着物の模様の百合までが、いのちあるもののように生々として見えた。

ゆみは、健一の三十五日忌のため、今日は紫地に白百合模様の銘仙袴を着ていたのだ。いくはそん

なゆみを、胸の中でいまいましく嘗^{あじ}った。『この、おしゃれあめ！』

二

ゆみの進退について、みんな黙っているうちに日がすぎた。誰もそのことはいい出しかねた。それは一つには田畑の仕事が、しきりにゆみの手を待っていたからである。

実際、苗代では苗が伸びはじめ、畑では麦が後作^{あとさき}を待つように穂を揃えていた。たんぼでは、もうすぐ田植期だぞと、蛙が警告顔に歌っている。こんな時、一番の働き手のゆみを失うことは、農家として致命的だ。そこで、少くとも田植が終るまで、誰も彼も、ゆみを引き止めておきたかったのだ。

こんなわけで、その日の午後、ゆみが里芋の肥料を堆肥^{たいひ}俵につめていると、

「そのこ、やしじゃ、きつと、いい芋が出来べよ。」と、めずらしくなか婆さんがお世辞を言った。

芋種^{よも}を選び別けていたいくも、

「それに、今年は種もいいからな」と附け加えた。いくも、婆さん同様、半分はゆみへのお世辞心からだった。

ただ、庄三だけが、ゆみのこしらえる堆肥俵を、次々牛車に積み込みながらいやにむつつりおしだまっている。しかしその庄三も、いざ、牛車を挽き出そうとする瞬間に言った。

「ゆみ、乗ったらよかっぺな」

「じゃ、自家用車で。ふふ……」

ゆみは笑って、車の端に腰かけた。

いくと、なか婆さんは、それを見送りながら、この分なら、ことしの田植は大丈夫だと安心した。

さて、畑につくと、庄三は先ず一服煙草をすいつけた。

ゆみは休むひまも惜しくて、一人で堆肥俵をおろしにかかる……。

「そんなに急^{*}くな。日は永いんだ」

空を眺めて、庄三はうそぶく。半分はふざけているのがゆみにも分った。それにしても、このところ、殆んど黙り勝ちだった庄三が、今のように軽々と口をきくのも、やっぱり健一のしまつがついた安心からだろうか。

しかしゆみは立場がちがう。

「でも、お父^とつあん、おらは、せわしいよ。今年は一日も早く田畑の仕事をすませて、ひまを貰うしかないものな」

ゆみは、麦畑の向うまで響くような声で言った。

「はははは。それは、そうだ。じゃ、俺^{いそ}も急ぐか」

庄三は、鍬をとって麦の畝^{うね}間をさくりはじめた。そのあとから、ゆみが堆肥をおとし、更に種芋をおろしてゆく……。

「お父^とつあん」

ちょっと顔をあげてゆみが呼んだ。

「おー。なんだ？」と庄三はさくりつつける。

「種芋は、このまんま土をかけるより、やっぱし一つ一つまっすぐに立てて、両方から土を寄せた方がいいそудよ」

「ほう。誰にきいたか」

「後の父うちゃん」

というのは、大里兵助のことで、彼の家は庄助の家の後隣り。略して「後の父うちゃん」だった。

庄三はくくう……と笑って、

「後のおやは、昔から立てるのが好きでな。だから、おっ母があの通り八人もがきめをなしたのさ。里幸もそれとおんなじで、やっぱし立てるとどっさり子がつくべから、ゆみもまねをしてやってみるな」

そして庄三は、こんどは鍬を休めて高々と笑った。

ゆみは、顔がほてった。背すじがむずむずした。もし他に誰かがいれば、ゆみもげらげら笑ったにちがいない。しかし庄三と二人きりでは、彼女は笑えなかった。

やがて庄三の休めている鍬の刃先に近づくと、ゆみはきまじめな顔つきで、

「代ろうか？」と手を出した。

「おまえ、さくりにえのか？」

「だって、お父つあんがこわそうだからヨ」

「ばかな。いくら年をとつても、まだまだお前なんぞに負けるものか」

庄三は、鍬の柄にかけたゆみの右手を、ぐっと上からおさえつけた。

ゆみはあわてて、鍬の柄をはなそうとしたが、かえってより強く取りおさえられる結果になった。

「はははは。どうだ、ゆみ。まだまだ、俺の方が強かっぺ？」

「だって、お父つあんは、男だもの」

「そうヨ。俺が男なのがわかったな」

庄三はゆみから手をひくと、ゆっくり敵の間に腰をおろした。

「じゃ、お父つあんが休んでるうちだけ、俺がさくるよ。」

「だけど、お前は、まだどうしてそんなに仕事を急ぐんだか？ 本気に、一日でも早く実家へ帰りたいのか。」

「別に急いで帰りたいと思ってるわけじゃねえけども、でも、結局はそうするしかないものな。」

「ふーむ。それについて、一寸話したいことがあるから、お前もここに坐ってくれ。」

いいながら、庄三は鎌をかたわらにおしやった。

「だって、こんなところでいったい何の話だか？」

「だじな話だ。」

「そんなら、仕事を終やしてから聞くべな。その方が落ちついていいもの。」

「でも、ゆみ。ここなら誰にも見えないし、聞こえもしなくていいんだ。他でもない。この間の話だが、お前はどこぞへ嫁に出直すつもりでいるのかい。」

「だって、それしかないもの。もしいいあんばいに嫁の口がなければ、その時は奉公でもして……。」

ゆみは、立ったままでもいらなくて、庄三の横にしゃがみ込んだ。

「ふーむ。なるほど。それはお前としては尤もな思案だ。だけど、ゆみ、俺とお前は、嫁舅として、五年も一つ釜の飯を食ってきたんだぜ。ちつとは、俺のことが分つてくれてもよさそうなものだ。」

庄三はさくり立ての敵土をつかんだ。

ゆみも右の掌に土をすくった。

「そうだろう？ なア、ゆみ。」

庄三は子供のいたずらのように、つかんだ土をゆみのモンペの膝に投げて、

「このままでは、松並の家は根絶やしだ。」

「……………」

「健は、一人っ子だったからなア。」

「……………」

「いいあんばいに、こんどは田畑がそっくり松並の名儀になったけど、かんじんの後嗣がいなくて、俺は、死んでも死に切れねえよ。お前だって、こうして松並の者になってみれば、ちつとは家はいじだと思っていってくれるんじゃないかね？」

「それは、思ってるとも。思っていりゃこそ、黙って五年も働いてきたんだよ。」

ゆみは、ともに庄三を見すえた。

庄三は、ゆみのその眼に狼狽ろうばいして、

「だ、だからヨ、こ、ここで、俺の考えを、き、きいてもらいてえんだよ。」と、常にもなく吃どもつてしまった。

「あーら。お父つあんはまだ話が あったのかい。」

ゆみは、からかい口調。庄三の聞いてもらいたい「考え」は、聞かなくてももうわかってるからだ。

しかしそれだけに、庄三はたのむ身の真剣さ。またしても、「う、家は、だいじだかな」と吃つて、こんどはかむっていた麦稗帽子をとった。しかしそれはシャッポをぬぐという洒落ではない。今の庄三には、そんな心のゆとりがあらう筈がなかった。彼は無意識に帽子のつばを握りしめて、

「ゆみ、た、たのむからヨ。離縁して実家に戻るなんて考えはおこさずに……俺だって、まだまだ働くよ。なあに、婆さんの歳まで生きりゃ、これからうまれるやつでも、二十一二にはなるからな。」

そうすりゃ、田畑はそっくりその子供のものになって、お前も安楽にくらせるといふもんだ。」

「でも、お父^{とと}っあん。そんなバカなことができるか、できないか、たいてい、わかってベネ。」

ゆみは、ぶいと立ち上った。が、立ち上り切らないうちに、ゆみは右足をつかまれた。しかし、そのとたんに、ゆみはつかまれた右足で庄三を蹴った。

けれども、庄三は蹴られても、それによって尻ごみはしなかった。反対に彼は挑発された昂奮で、ぐいとゆみの身体を抱きすくめた。

「だめだよ、そんな、じょうだん、悪いよ。」

「ゆみ、じょうだんじゃねえぞ。」

声にも自信があった。庄三は、のしかかった。

ばりばりと、青麦がしたたか折れてたおれる……。びいびいと、遠い空でひばりが啼いていた。そして、短い時が過ぎた。

ゆみは、ちらと青空を仰ぎ見たように思ったが、実際は、彼女は眼^{まなこ}を閉じたままだった。

北側に松林をひかえた五反歩一区画のこの畑には、めったに他人のやってくる気づかいがない。松林につないだ牛も、昼の餌を反芻するたのしみに耽^{ひた}っているのか、物音一つたてぬ静けさ。その中で、庄三の荒い息と、麦の穂ずれが、ゆみの耳を掠める。

「ゆみ。」

「……………」